

## 倉林先生の思い出

倉林義正先生（一橋大学名誉教授、1926-2021年）が2021年10月14日に他界された。夫人が数年前にお亡くなり、その後施設に移って生活されていた。自主隔離が解除されれば、日本でお会いしようと思っていたが、その願いは叶わなかった。嚥下障害から肺炎を患われたが、回復が難しかったようだ。

倉林先生は中山伊知郎門下生で、戦後、久武雅夫先生から国民経済勘定論という分野があることを知らされ、それを専門にするようになったと話されていた。この分野は1960年代から注目を浴びるようになった分野だが、専門家の数が少なく、経済学部でも講義を開講している大学はほとんどない。たいへん重要な経済分野だが、研究する人がきわめて少ない。そのことが一知半解の議論を世の中に蔓延させる原因にもなっている。

一橋大学大学院修士課程の私の指導教官は種瀬茂、博士課程の指導教官は関恒義だった。種瀬先生は杉本栄一門下生、関先生は中山伊知郎門下生である。ちょうど久武先生の後を継いで、種瀬先生がICU（国際基督教大学）で非常勤講師をされていた。その縁で、ICUの卒論指導をお願いし、一橋大学大学院入学と同時に種瀬ゼミナールに入った。博士課程に進学した時に、近代経済学批判で注目を浴びていた関恒義先生のゼミナールに移籍した。

この頃の一橋大学は自由主義的な雰囲気満ちていて、ゼミナール間の移動や分野が違う先生の講義聴講には何の障害もなかった。杉本栄一の影響もあって、近代経済学とマルクス経済学との交流が活発な珍しい大学だった。関恒義が戦後直後、ノイマン論文に刺激され、数学を勉強するために東大弥永昌吉ゼミに国内留学していたことがある。その当時のゼミ仲間である二階堂副包先生を大阪大学から招聘し、津田塾大学からは数学者の松坂和夫先生を招聘するのに尽力された。松坂先生は位相数学と代数学の入門講義を担当され、二階堂先生は線型代数をベースにした数理経済モデルを学部で講義されていた。二階堂副包著『現代経済学の数学的方法—位相数学による分析入門』（岩波書店、1960年）は、8頁のノイマン論文を解説するための著書である。私は二階堂、松坂両先生の学部講義も聴講した。経済研究所所属の倉林先生は学部の講義を担当せず、大学院で国民経済計算論を開講されていた。研究所の小さな部屋で、数名の大学院生を相手にした講義だった。

私の法政大学赴任に際し、法政側の窓口になっていただいたのは田沼肇先生で、「近代経済学も分かる若い研究者を紹介して欲しい」と関先生に依頼され、その話が私に回ってきた。その後、倉林先生との雑談で、私が所属していた法政大学社会学部の話になった。「社会学部に田沼肇というのがいるだろう。彼は小学校の同級生だよ」と言われ驚いた。麹町小学校出身だったと記憶しているが、「田沼は秀才だった」と話された。田沼先生に確かめたら、「倉林義正という名から分かるように、彼の親父は宮内庁に勤務していた由緒ある家だ」と教えていただいた。

法政大学に赴任してからも、しばらくの間、大学院後輩にあたる作間逸雄君（専修大学名

誉教授)と倉林先生を囲んだ国連の国民勘定体系(System of National Accounts)の勉強会をもった。研究所の会議室で、3名だけが集まる勉強会だった。その頃、法政大学飯田橋キャンパスは荒廃していて、どこかに留学して静かに研究したいと話したところ、倉林先生から、「ハンガリーが面白いよ」という意外な言葉をいただいた。国民経済計算論の世界では社会主義圏の国民所得計算との比較が一つのテーマになっており、ハンガリーがこの比較研究に積極的だから面白いということだった。思いも寄らないハンガリーの話に驚いたが、藁にもすがる想いで、ハンガリー留学の可能性を調べた。政府間交換留学生(学士取得者対象)制度があることが分かり、それに応募したのがハンガリーとの出会いの始まりである。実際はどこでも良かったのだが、たまたまハンガリーになった。

いろいろな事情があって、最終的に1978年12月にハンガリーへ立った。倉林先生からはハンガリー中央統計局の専門家宛に紹介状をいただいた。しかし、ハンガリーの留学受入窓口は、統計局ではなく、カール・マルクス経済大学国民経済計画化学科への配属を決めていた。官庁に留学生を受け入れる習慣がなかったのだろう。後で分かったが、国民経済計画学科は当時の経済大学のエリート学科で、そこから計画庁の研究員になり、やがて計画庁長官になるのが出世コースだった。体制転換時の首相だったネーメットもこの学科出身だが、私が配属された時にはすでに計画庁付属研究所に移籍していた。ノイマンを研究していたザライ・エルヌーや応用数学をやっていたモーツアル・ヨーゼフが研究室にいた。とくにザライとは長い親交を結ぶことになったが、今年1月に他界した。その辺りの事情はザライ追悼文に書いた。

その後、1980年に法政大学に戻った。倉林先生は国連本部統計局局長と統計委員会議長を務められた(1982-1986年)。この間、一度だけ、ブダペストでお会いした。私がブダペストへ出張した折、1983年だったと記憶しているが、ハンガリー中央統計局の招待でハンガリーを訪問されていたのではないかと記憶している。エルケル劇場でオペラを鑑賞し、街中で夕食をご一緒した。

倉林先生の二度目のハンガリー訪問は1989年である。当時、私は日本大使館の専門調査員として、ブダペストに赴任していた。9月初めにバラトン湖南端の町ケストヘイで、国際投入産出学会(International Input-Output Association)の会議が開かれたので、私の車でブダペストから一緒に出かけた。帰路、倉林先生は尾崎巖先生(慶応大学)等と一緒に、ケストヘイから列車でウィーンへ出発された。ちょうどオーストリア国境が開放され、東ドイツの人々が車や列車でオーストリアに出国する混雑に出くわした。東欧社会主義崩壊の歴史的瞬間に立ち会われた。

倉林先生は1990年に一橋大学を退官された後、東洋英和女学院大学に移られた。私は法政大学を辞職して野村総合研究所に移ったが、折に触れ、日本の大学に戻る意思がないかと尋ねられた。「何時までも民間企業にいられるわけでもないだろうから、まだ今なら大学の職を紹介できる」ということだった。一度だけ、東洋英和の倉林ゼミで授業したが、日本へ戻る気はなかった。



この頃に、「経済セミナー」の鼎談を行った。ちょうど、1994年春に小林研一郎ハンガリーデビュー20周年記念行事を組織しているところだった。倉林先生は1992年に創設された文化経済学会の初代会長に選出されたばかりだった。

三度目のハンガリー訪問は2000年だった。年初にオペラハウスがワーグナーの4部作「ニーベルングの指輪」を上演するという情報を送ったら、是非、観劇したいということでチケットを手配した。倉林夫妻はバイロイト音楽祭のチケットが入手できた時も日本から駆けつけるほどのワーグナーファンだった。当時、私は足繁くオペラハウスに通っていたが、朗読劇のようなワーグナーだけは避けていた。しかし、4日間15-6時間、ワーグナー公演を最初から最後まで観劇した。長時間の公演だが、意外に飽きることがなく、最後まで楽しむことができた。ハンガリーのソプラノ歌手マルトン・エヴァだけでなく、オーストリアやドイツからの客演もあり、オペラハウスは満席だった。外国からの聴衆が多く、とりわけ音楽関係者が目立った。

関先生も倉林先生も1945年に英訳出版されたノイマン論文の研究から戦後の研究を始められた。友人のザライのアカデミー会員就任講演記録（「経済方法論からみたノイマン」『経済セミナー』2003年10月号所収、<http://www.morita-from-hungary.com/j-01/01-04.html>）を翻訳し、倉林先生にお渡しした。「非常に面白い」という評価をいただいたのを覚えている。

その後も日本に戻るごとに、お会いする機会があった。指導教官ではなかった倉林先生との繋がりが、私の人生を変えた。倉林先生からいただいた一言が、私とハンガリーを繋げることになった。何とも不思議な縁である。天寿を全うされた倉林先生のご冥福を祈りたい。